

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 14 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04759

研究課題名(和文) 子どもの生活実践力育成に資する教師の教育実践力養成カリキュラムの開発

研究課題名(英文) Development of teacher education curricula contributing to nurturing children's practical abilities for their life

研究代表者

林 未和子 (MIWAKO, HAYASHI)

三重大学・教育学部・准教授

研究者番号：20304983

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本と北米と北欧4カ国における小学校から大学・大学院までの教育の比較考察を通して、各国の特徴を踏まえた教師教育の在り方を検討し、教師の資質能力の向上に資するカリキュラムの提案を行った。米国では子どもの課題探究・解決のプロセスを明示したProject-based learning、カナダでは人間の全体性を重視したホリスティック教育の哲学思想、北欧では、大学・大学院修士課程を通じた教師教育の質的改善の取り組みが参考になった。

人間の生の営みに関する教育に焦点を当てると、各教科の枠組みや様々な学問分野を超えて、統合的な視点から体系的な教師教育カリキュラムが必要であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、人間の一生を視野に入れ、小学校から大学・大学院に至るまでの教育を対象とし、学習者の生活実践力の育成を目指している。日常生活において知・情・意・技・体を統合的に働かせる生活実践力は、生活者の生涯にわたる全人的な人間形成にも貢献できる。また、学習者の生活実践力育成に資する教育者の教育実践力の内実を明らかにし、大学・大学院における体系的な教師教育カリキュラムを開発するとともに、教師教育の充実・発展に貢献できる。

本研究は、子どもの生活実践力育成の理論と実践に対して新しい方向性を提案し得ると同時に、教師の教育実践力を養成する大学・大学院のカリキュラムの将来展望を示唆するものである。

研究成果の概要(英文)：This study examines the model for teacher education considering characteristics of each country and develops the teacher education curricula which contribute to nurturing teachers' abilities and qualities. I found the following points important to develop teacher education curricula for undergraduate and Master's degree programs in Japan. In the United States, Project-based Learning, which clarifies the process of exploring and solving the challenging projects for children, is useful. In Canada, philosophical thoughts of holistic education which emphasize the wholeness of human beings are insightful. In the Nordic countries, their attempt to improve the quality of teacher education curricula through the undergraduate and Master's degree programs is applicable. It is suggested that well-organized teacher education curricula from a comprehensive viewpoint are needed which focus on human life education beyond the framework of each subject and various academic disciplines.

研究分野：教科教育学

キーワード：カリキュラム 教師教育 大学 大学院 生活実践力 教育実践力 生の営み ホリスティック教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、関連分野の先行研究を踏まえ、教育実践(授業と学習)は、学びの意味世界を構成する認知的・文化的な関係、他者と意思疎通をはかる対人的・社会的な関係、自己の内面と向き合い、生き方を探究する倫理的・実存的な関係が有機的に関連し合って成立するものと捉えている。(佐藤学『カリキュラムの批評』世織書房 1996年 pp.18-19, p.205) また、生活実践力は、生活実践を方向づける多次元的な認知・情意プロセスと生活実践の遂行を促す一連のスキルを含み、生活実践課題の解決に向けて、あらゆる能力を連関・統合する高次の能力であると考えられている。

研究者は、これまでの研究において、学習者に日常生活の実践場面で働く生活実践力を育む上で、その鍵となる生活実践知を形成することが重要であるとの認識に立ち、生活実践知形成を中核とする中等教育段階の家庭科カリキュラムを理論的に考察してきた。現在、初等・中等学校における生活実践力育成および大学・大学院における教育実践力養成との関係性について考察し、現職教育を含め、教師教育カリキュラム全般の問題点を検討しているところである。

それゆえ、本研究を進めるにあたり、既に6年制の教師教育カリキュラムを実施しているアメリカと生の営みの全体性を重視するホリスティック教育を推進しているカナダの先駆的な取り組みを分析することは、日本の今後の方向性を探る上で、大いに参考になるものと考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、人間の生活実践課題を生涯発達の視座から捉え、学習者が課題解決を通して生活実践力を育成することができるよう、教師の教育実践力向上に資する体系的なカリキュラムを開発することを目的としている。具体的には、日本、アメリカ、カナダの小学校、中学校、高等学校、大学・大学院で行われている人間の生の営みを中心テーマに据えたカリキュラムと授業実践を分析することによって、その特質や問題点を明らかにするとともに、日本の各学校段階における子どもの生活実践力育成を支援する6年制の教師教育カリキュラムを開発する。

研究者は、生活実践力を「他者との関わりを通して生涯にわたる自分の人生を主体的に生きる力」をみなし、大学・大学院レベルの教師教育カリキュラムの改善によって、最終的には、学習者の生活実践力を育成できる教育者の教育実践力の質的向上を目指している。

3. 研究の方法

本研究は、日本、アメリカ、カナダおよび北欧4カ国の初等・中等・高等教育の現状を知るため、文献調査と先進的な事例の現地調査を行い、比較考察する。また、人間の一生を見通した広い視野から生活実践課題を検討し、生活実践力育成を目指すカリキュラムと授業実践の特質や可能性を追究する。さらに、学習者の生活実践力育成に資する教師の教育実践力の内実を解明するとともに、授業実践の改善を目指して、大学・大学院における体系的な教師教育カリキュラムの開発を行う。

具体的には、まず、関連分野の文献調査により、日本、アメリカ、カナダ、北欧4カ国における先行研究を吟味し、本研究の位置づけを明確にする。次に、日本、アメリカ、カナダ、北欧4カ国の先進的な取り組みについて現地調査を行い、関係者へのインタビューと授業実践の参与観察から、初等・中等・高等教育の現状を把握する。また、生涯発達の視点で人間の生活実践課題を捉え直し、生活実践力育成を目指す一貫した教育の理論的枠組みを提示する。その上で、日本、アメリカ、カナダ、北欧4カ国の教師教育研究の成果をもとに、学習者の生活実践力育成に資する教師の教育実践力養成の理論モデルを構築するとともに、それに基づく大学・大学院における体系的な教師教育カリキュラムを開発する。

4. 研究成果

(1)平成 28 年度成果

本年度は、日米の大学・大学院のカリキュラムを収集し、生(生命・人生・生活)の営みに関する教育の位置づけと内容の概要を把握した。また、日米の大学・大学院の授業を参観し、大学教員と学生にインタビューを行い、学習者の学びの様相も踏まえながら、教育学の視点から、小・中・高等学校と大学・大学院のカリキュラムの接続、生の営みに関する教育の内容について検討した。日本において、生の営みに関する教育は、小・中・高等学校の家庭科を中心に、生活科・社会科・保健体育科・看護・福祉等の分野、道徳や総合的な学習の時間、ホームルームでも扱われており、衣食住等の日常生活、自然や環境との調和、家族関係、道徳・倫理、性の多様性、生命の尊厳、保育、障がい者のケア、高齢者や病弱者等の看護・介護といった幅広い内容が取り上げられている。大学・大学院教育に関して、教育学部・教育学研究科では、教員養成の家政教育・家庭科教育コースを中心に、その学問的背景は、教育哲学、比較教育学、教育社会学、生涯教育、教育方法学、教育課程論、教育心理学等、様々な専門分野と関連しているものの、断片的に扱われている。生の営みに関する教育内容は、学部の教養教育を土台として、専門教育でも学ばれているけれども、多様な学問分野を超えて、統合的な視点から体系的に学ぶためのカリキュラムが用意されているわけではない。

一方、米国では、小・中・高等学校において、全国的なスタンダードに基づく評価が奨励され、アカデミックな教科が重視されており、大学・大学院においても、生の営みに関する教育は、日本と同様、家庭科教育・家政教育に関連したコースを中心としつつ、他教科にも分散しており、断片的な扱いに留まっている。大学教員と学生のインタビューから、カリキュラム構成と授業方法を見直すことで、その必要性と重要性を専門外の人たちに理解してもらえるように工夫できるものと考察された。

(2)平成 29 年度成果

本年度は、日米の先進的・特徴的な大学・大学院のカリキュラムを収集し、学生の学びを支援する図書館を訪れ、生(生命・人生・生活)の営みに関わる国内外の蔵書、学習環境や利用の実態、サービス支援の面からの検討を行った。具体的には、日本では旧帝大などの国立大学の教養教育および教育学部・教育学研究科、教員養成に特化した大学の教育学部、教養教育を中心とした私立大学など、様々な大学において学習環境や学習支援がどのように行われているかを実際に訪問する中で感じ取り、カリキュラム分析の際の参考にした。

また、多様な分野からの社会人大学院生の受け入れを積極的に推進している先進的な大学院授業の参観とその大学院教育プログラムの修了生による海外研修成果発表会に参加させていただき、これから教育プログラムに入学する学生、修了した学生、論文指導に関わった大学教員からの聞き取りも参考に、そのプログラムの独自性と可能性について検討を行った。さらに、アクティブラーニングの先駆的な事例として、米国で PBL(Project-based Learning)をいち早く採り入れて成功している、教育効果が注目される特色のあるオルタナティブ・スクール(幼・小・中・高等学校)を幾つか訪れ、施設見学と授業見学、生徒と教師、PBL を先導した元大学教員、オルタナティブ・スクールを支援する教育関連団体のチーフなどにインタビューを行い、その成果と課題を考察した。

これらを踏まえ、自分自身の大学・大学院での授業改善を目指して、国立大学が開催した PBL(Problem-based Learning)セミナーに参加し、PBL に基づく大学教育の具体的な事例について学ぶとともに、様々な大学教職員から構成されるグループでシナリオづくりに取り組み、自身の授業への導入可能性について検討した。

(3)平成 30 年度成果

本年度は、世界的に教師教育の質の高さが注目されているフィンランドを訪れ、オウル大学の教師教育に携わる研究者による講演、小・中・高等学校・職業専門学校・オウル大学での教育プログラムについての発表を聴くとともに、オウル大学教育学部附属学校の訪問、公立学校の訪問を行った。

フィンランドでは、小学校から高等学校まで全ての段階の教師に修士号取得が求められており、クラスは少人数制で、現実生活の現象を把握することから始まり、実際的な課題の探究・解決のプロセスを重視しており、子どもの関心を引き出しながら、生きるうえで役立つ応用的な能力を育成することに貢献している。全ての学校レベルの教師が一緒に学び合う研修も充実しており、教師集団のコミュニティがうまく形成されていることが伺えた。研究者が見学した地域の比較的大きな規模の新しい公立学校では、教師の要望を取り入れて学校の設計を行っており、学校長がそれぞれの教師の創造的な授業構想を理解しようとしている姿勢がみられた。職員室は日本とは異なり、ラウンジのようになっており、教師同士が休み時間にコーヒーを飲みながら、子どもたちの様子や気になることがあれば、情報を共有し合うなどアットホームな雰囲気関係作りが行われていたことが印象的であった。

どんな子どもも学ぶ権利が保障されるように、特別なニーズを持つ子どもへの配慮や支援が手厚く行われていることも、フィンランドの特徴であると考えられる。

(4)令和元年度成果

本年度はスウェーデン、ノルウェー、デンマーク、フィンランドを訪れ、学校訪問と授業見学等を行った。

スウェーデンのウプサラ大学の教師教育に関する授業見学(社会科・家庭科)、スウェーデンの中・高等学校の授業見学(家庭科・英語)、ノルウェーのオスロ大学で教師教育に関する教育学と社会科の授業見学、ノルウェーの中学校の授業見学(家庭科・英語)、デンマークのコペンハーゲン大学の教師教育者へのインタビュー、中学校の授業見学(家庭科)、フィンランドのヘルシンキ大学の教師教育者へのインタビュー、ヘルシンキ郊外の中学校の授業見学(家庭科・英語)、中学校の家庭科教師へのインタビューを行うとともに、教育フェスティバルに参加した。北欧の学校(中・高等学校および大学)の授業見学と関係者へのインタビューを通して、4カ国に共通する特徴と相違点を見出すことができた。

共通する特徴としては、どの国も教師教育を教育改善の鍵とみなし、学部と大学院修士課程までを含めた一貫した6年間の教師教育プログラムを充実させていた。そのため、教師の職業上のアイデンティティーは高く、教師の資質能力の向上が社会的にも期待されていた。

家庭科教育の視点からみると、豊かな自然と共生し、日々の生活文化を大切にする国民性が教育への見方・考え方にも反映されていると考察できた。環境に配慮したライフスタイルを重視し

て、日常生活で行為実践できる能力が目指されていた。英語の授業は、4カ国に共通して、生徒の主体性を尊重したアクティブラーニングが行われており、中学校レベルでも、思考力を働かせて議論できるレベルの実践的英語力が身についていた。北欧4カ国の具体的な相違点については、それぞれの国の教育政策と学校の方針によって異なるが、いずれにしても、教師教育の質を高めるための取り組みがなされてきたことは注目できる。

(5)全体を通しての成果

研究者は、子どもの生活実践力の育成に資する教師の教育実践力養成カリキュラムを開発することを目的として、日本、アメリカ、カナダおよび北欧4カ国の初等・中等・高等教育における生(生命・生活・人生)の営みに関する教育について文献調査と授業実践の参観および関係者へのインタビュー等の実地調査を行い、本研究を進めてきた。

日本と北米と北欧4カ国における小学校から大学・大学院までの教育の比較考察を通して、各国の特徴を踏まえた教師教育の在り方を検討し、教師の資質能力の向上に資するカリキュラムの提案を試みた。米国では子どもの課題探究・解決のプロセスを明示した Project-based Learning、カナダでは人間の全体性を重視したホリスティック教育の哲学思想、北欧では、大学・大学院修士課程を通じた教師教育の質的改善の取り組みが参考になった。

人間の生の営みに関する教育に焦点を当てると、各教科の枠組みや様々な学問分野を超えて、統合的な視点から体系的な教師教育カリキュラムが必要であることが示唆された。家庭・学校・社会が連携して、ホリスティックな視点で人間の生(生命・生活・人生)を中心テーマに据えた大学・大学院の教師教育カリキュラムのモデルを開発した後も、その普及・実践を通して、授業改善にフィードバックし、常に教師教育の質的向上を目指して研究を行っていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 林未和子	4. 巻 第54巻
2. 論文標題 北欧4カ国の生活文化と教育	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語文化学会論集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 林未和子
2. 発表標題 北欧の家庭科教育 - 視察旅行の報告を兼ねて -
3. 学会等名 言語文化学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本教科教育学会（林未和子ほか37名）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 教育出版	5. 総ページ数 213 (pp. 126-131.)
3. 書名 教科教育研究ハンドブック - 今日から役立つ研究手引き -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----